

阿吽阿講演

67
438

67-438



1200501281638

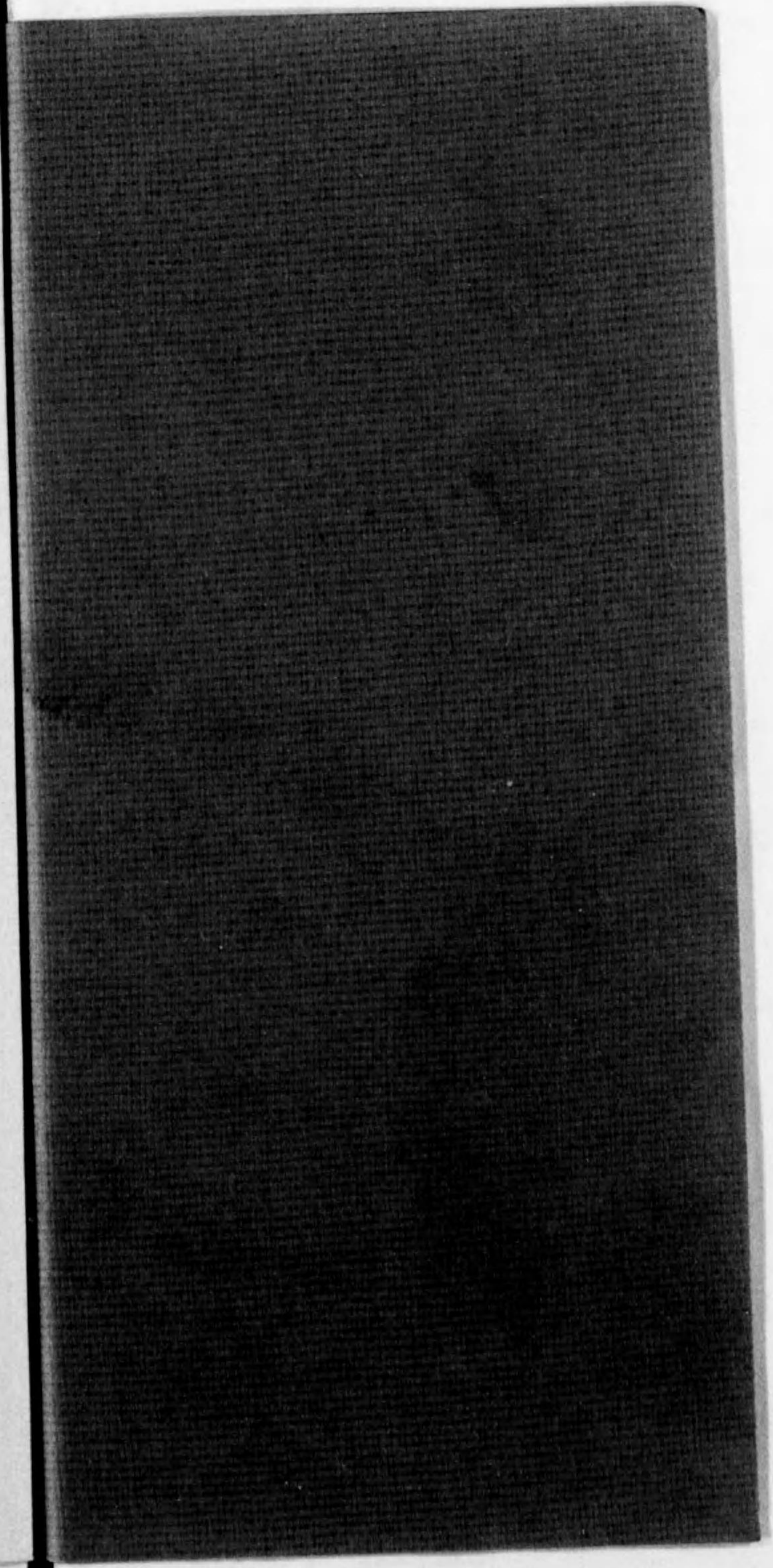
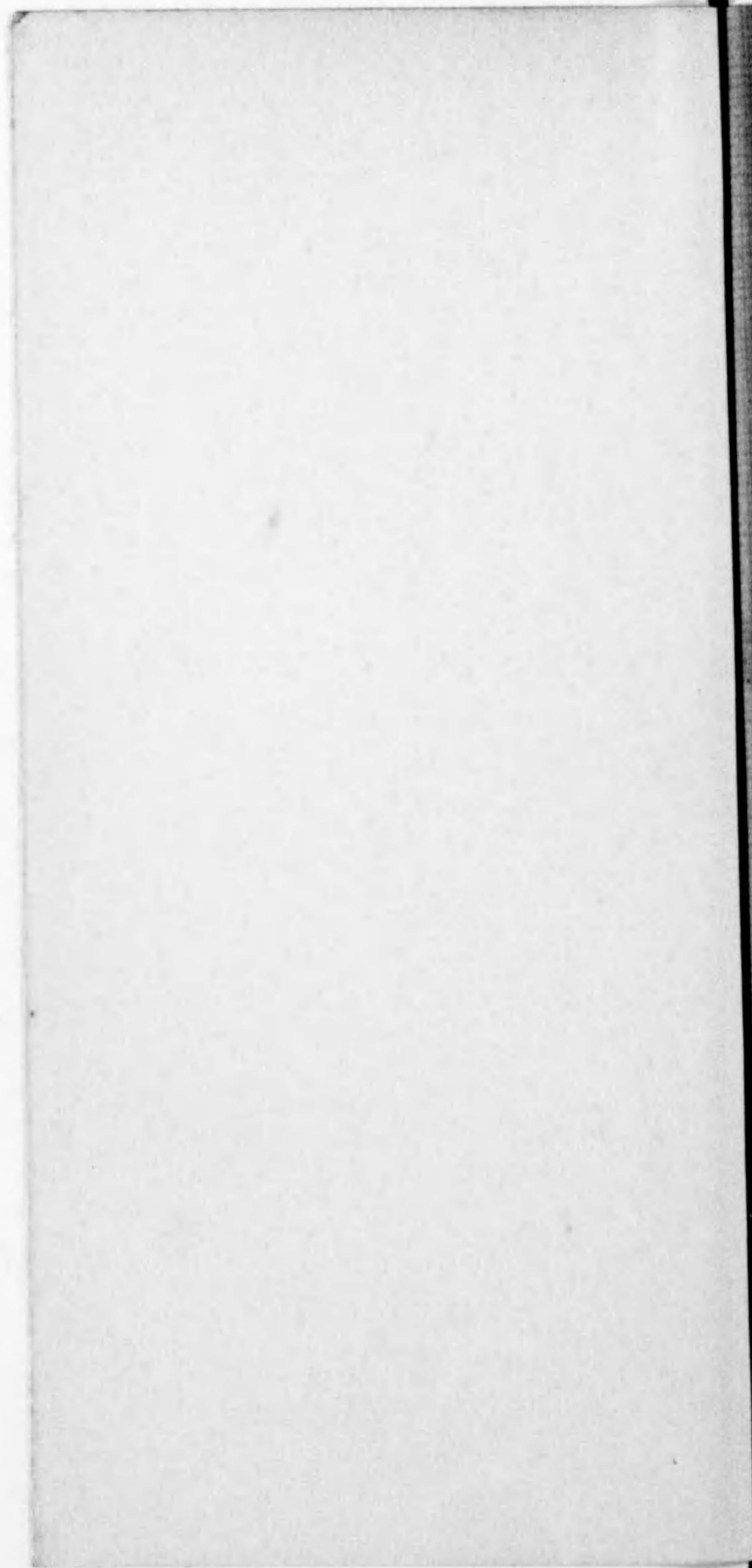


始



67
438

阿吽阿講演





十 阿 あ

講
演

富岡清行印
寄贈本



序

予は最初阿吽阿を著はしました節は後日に至つて其以上に何等附加する意志はなかつたのであります。其理由としては予の性來訥辯なると文章に拙きとは若し其に何ものかを附加するに於ては却て阿吽阿本有の意味を傷け救ふべからざる誤傳の基ともなることを虞ひ斯ることは寧ろ予に共鳴する筆舌熟達の後生に俟つに如かずと考へたからであります

二
した。然るに其後度々身邊の者より阿吽阿は現在有るがまゝにては讀者其の了解に苦しみ、寧ろ誤解せらるゝ虞さへもあると思はるゝが故に補遺註釋の意味を以て假令粗雑なりとも無きには勝ると思ふから勉めて一通り講演せよとの勧めがありましたので訥辯ながら本日阿吽阿會館落成披露御挨拶申し上げます此機會を始めとして今後數回に涉り阿吽阿に就き少しく演べようと思ふのであります。暫の間御清

聽を願ひます。

昭和十年二月二十四日

東京市芝區伊皿子町二十六番地

助團法人阿吽阿會本部にて

富田俊次郎

阿 吽 阿

先づ題目につきまゝして演べます、が、是は後に體認第七の
始めに掲げてあります通り絶対靈格は言語文字を用ひては
何としても表章し能はぬものであります、則ち口を開き言
はんとすて先づ阿と發音しても繼ぐべき音の出る所を知ら

ず唯黙して吽と口を閉るの外はありません、そこで復更に
言はんとして阿と發言しては再び次に發すべき音を辨へま

せんので又黙する外ありません、之畢竟言語道斷の靈格と
 言ふ事を意味して居ります、然し、言語道斷ながらも絶對
 についての思念を方向づける便宜上假りに「智」なる言字を
 用ふることに致しました、其所以は予の觀る所宇宙は叡智
 其のものであるからであります、又形容的にも時間的空間
 的に縦横無窮に彌るものを章すには其れが他の言字に比し、
 より適確に邇しと思はれるからであります。標題の謂れ此

の如しとして偕て是より本題につき演ぶるのが順序であり
 ます、が、其れよりも寧ろ逆に、本題第一を體認した者の
 當然懐くべき概念の大要を演べることに却て阿吽阿につい
 ての自覺を促すに便宜多しと思ふのでありますから一と通
 り予の體驗をお話することに致します。固より體驗談であ
 りますから決して他を批評するのが予の本意でないことを
 特に御承知願つて置きます。

遺囑第八の始めにあります通り予は幼少の時より人生の第一義知識に就き知る所なき寂寞感に勝へなかつたのであります。爾來何か確實なものに頼つて以て安心を得たく種々思ひを回らし一斑片鱗ではありましたが所謂先覺者の知識と其の垂教を検討して予の尋ねるものを其中に探し索めたのでありました、其に依ると、或教では凡有るものは業因によつて出来たものである、此穢土に疾ツラふものも無上正覺

者を信仰し其名を稱ふることのみに依つて覺者の誓願たる一切救済の恵を享け當來は必らず極樂淨土に往生すべしとの決定、と、又云ふには、悉皆萬有は本來覺者と同性を通有するが故に惡因を滅却すれば遂には覺者と成り得べしと云ふことを眼目とするもの、如くに思はれた。又他の教では、凡有る物は自分の父なるゴツドの創造したもので自分は其の子である。自分をゴツドの子なり救世主なりと信ず

るものは救はれん、故に、世上の人々は其私慾を捨て、隣を愛し自分がゴツドの子であり救世主であることを信じて永久の生命を享くべし。と云ふのが主なる眼目らしく思はれました。又或學説では、宇宙間には唯だ物あるのみ、物以外に心もなく又靈と観るべきものもあるべからず、物は物自身に必然的に機構し必然的に推移するものなり、と、観る説のやうに思ふのがありました。右の外にも數々の教

はあります、が、著しいものは右の如きものであります。斯の如く教が數々ある以上は何れが果して眞理であるか豫め研究辨別しなければ頼つて以て安心すべきものを知るこゝとが出来ません。そこで先づ前記の第三の宇宙は唯だ物あるのみと観る學説に就いてであります、此の説は何としても予の同意致し能はぬものであります、予の觀念では萬有は奈何に觀ても統齊せられたるものにして萬物は常に其

二三
の統齊に順つて推移進展するものと観るより外には理解し能はぬのであります、故に、此説は此以上研究することを断念したのであります。

第二に掲げました教は凡有るものは一定時に創造せられたるものなりと云ふのであります、が、萬物は古來間斷なく進展（進化と云ふに同じ）して來たもので今後も亦斯くあるべしと観るのが近世人の見解であり、予も亦一切萬有は

二三
統齊に順つて常に進展するものと観るより外に餘念無いのであります、此の現象界に一物として一定固着するものがあるとは考へ能はぬのであります。又所謂ゴツドの子なり救世主なりと信ずるものは救はれんと云ふ言葉の裏には信ぜざるものは救はず棄て、顧みずと云ふことを暗示してゐるやうに思はれる、のみならず、世の終りに臨んでゴツドの子更に世に出て過去現在悉皆人類の功罪を裁判して罪の

一四
重いものは之を永久滅盡に附すると云ふことであります。
が、此の信ずると否とに依つて救ふと棄てるとの二つに斷
ずることと、世の終りに到つて曾て地上で罪を犯したものは
容赦なく壞滅せしめると云ふこと、の二つは愛憎の行は
れる人間界に於てさえ甚だ忍び難きことを敢て爲さんとす
る主を一切抱擁唯愛あるのみであるべき筈の天主なりと認
めることは何としても予の得心し能はぬ所であります。上

の三點は甚だ會得し難きが故に予は此教によつては安心を
得難しとして斷念したのであります。

第一に掲げました教は其の説く所は教派に依つて一様では
ありません、或は物、心、の二元を認めるが如く、或は唯
識の一元のみを認めるが如く尙ほ正覺も亦己を正して苦因
を滅し煩惱を解脱して衆生を淨化する所の極上道德を指す
もの、如く或は其れ以上の或ものを意味する如くにして諸

説多岐複雑なるがゆゑと此教では絶対觀に關して及び現象界の始中終觀に關して説くところ何分にも審ならず甚だ解し難きがゆゑに此教の中にも亦予の索めるものを發見し得なかつたのであります。

以上二教に付いて予の不満足に思ふ主なる點は、第一は絶対觀に關して第二は現象界の始中終觀に關して第三は無條件信仰を救済の前提とすることに関してあります。

御愛御慈悲をはつきり自覺し衷心感激して歸命信仰するものが眞の信仰であります。之に反し信仰を前提とすることは批判を禁制して教義に權威を付け信者に盲目服従を餘儀なくせしめるもので下度催眠術に罹る者が施術者の暗示のまゝに言行するに似たものがあります。催眠術に罹れる夢遊者は何時かは覺める時の來るべき筈でありまして相も變らず我執偏見輪廻流轉の徒たるを免がれません。レ

一ニンが宗教を貶して阿片なりと云つた理由も此にあるのであらうと思ふのであります。併し乍ら前記二教の如きは古來人道的に人心を和げ甚しい荒肆に陥らしめなかつた功績の大なるもののあることには予も亦之を頌賛するに吝なるものではありません。

以上演べました如く之等の教又は學說に依りては予の最初から懐く寂寞不安感は依然として何等慰められる所もなく

一時は失望の野に彷徨したのでありましたが、尙初一念に冥想して息むことがありませんでした、其の中に不思議に阿吽阿を自覺して豁然として雲霧の一時に霽れた様になりました、今更に阿吽阿の有がたさ勿體なさを泌みく感謝して感涙に禁えなかつたのであります。

萬有は元は「智」妙活動の連鎖部分である無臭無色の智性でありますが、其れが連鎖活動中偶々或境に留滞し之を久

しうして其境遇現象化したものであります、所謂現象界といふ萬有個性の始。めてあります。箇々欲偏見執着し輪廻流轉煩悶苦惱を繰返す個性も其或境に滞る思念即ち箇々偏見を斷絶すれば復た本來の無臭無色の智性に還り根本に契合して全一活動永久幸福の妙境に合ひ奉るのであります。然れば此現象界は勿論變態でありますから個性は御引導に順ひ奉ることに依りて此變態原因我執偏見を斷絶し遂に智性

明かになり永久幸福の妙境根本智に合ひ奉るのであります、此御引導に順ひて我執を捨離し偏見を斷絶する次第が即ち次に演べます所の萬有の中間期であります。一朝にして全然我執偏見を斷絶し能はずとも及ぶ限り力を竭して息むことがなかつたならば遂には無臭無色の智性明かになります。例へば覆面をする者は前方を視ること能はないが覆ふ所の布帛を段々に除去すれば布帛の薄らぐだけ其れだけつゝ次

第に前面に明を認めることが出来て参りますやうに努めて我執偏見を避け遠ざければ刻々に努力相當幸福の妙境に近づき、遂には根本智を自覺するに至るのでありますから我等個性は夢寐にも油斷なく我執を捨離し偏見を斷絶する努力の一路を邁進すべきであります。

茲で少しく附言して置きますことは箇々偏見即ち思念其ものが現象すると云ふこと、現象界萬有は終には無臭無色の智性に還元すると云ふこと、は現實の見聞世界に慣れたるものには容易く了解し難き問題であります、之は予の直覺でありますが故に此に確證を擧て説明するのは困難であります、併しながら其は恐くは知識の不足に因ることであらうと思ふのであります。なぜならば物質はポシトロンやエレクトロンなどと名付けるもの、運動から成立つと云ふ學説もありラジウムやウラニウムなどと名付ける放射物

體は放射に依つて其の物量を減ずる（液體の蒸發に依つて減量するのとは全然異なる意味にて）實驗もあるのでありますから現今の科學知識を標準として絶對を豫斷することは須らく遠慮すべき事と存じます、無形の電子運動と有形物質、放射物體減量と物質不滅説を一つの參考とし、思念と現象、偏見斷絶と現象滅盡の關係を篤と究明すべきであります、卒爾に此關係を否認するのは不謹慎であり須らく

知識の進歩を俟つ外なしと確信するのであります。

前に演べた如く個性が偏見執着して種々境に、或は停滯し、或は流轉して其の境遇を煩悶苦惱してゐる間も阿吽阿の御愛は萬境に洽く常に萬有を御引導向上せしめ給ひて息むことなきは個性の無意識に御愛を感じて感激感謝し或は交互扶持することによりて知れるのであります。然るに悲しい哉復又箇々欲偏見御引導に反對し求めて煩悶苦惱を繰返へ

二六
すのであります。阿吽阿の御愛は引力磁力の作用に間斷なきが如く常に個性を引導向上せしめ給ふばかりではなく之に加ふるに御引導に背戻する行爲を廣い意味の御愛に依つて制節矯正し給ふにより個性は其背戻する所の質量相應の物理的精神的遺傳的被制節苦惱を受けるのであります。背戻と制節は背戻事實の表裏にして背戻すれば必然制節が伴なふのであります、其おかげで個性は一方我執・偏見不注

意を慎しみ（御引導に順はざるは不注意）他方悠久不斷の御引導に由つて益々進展向上して遂に至善中正に止まるのであります。是の如きは世上現前の有様であります。歴史、劇作、物語、稗史、小説類も亦斯る向上背戻被制節の渦ワヅに愛惡哀樂する古今世態の描寫に外ならぬのであります。阿吽阿は申す迄もなく絶對でありますから信ずるが故に救ひ信ぜざるが故に棄てるとか命令に忤ウカふが故に罰し能く守

るが故に特に擇んで愛すると云ふが如き彼れと此れとの偏頗もなく又相對的的目的のあらせらるる筈もないのであります。唯だ御自愛妙動に伴なふ部分界の常時向上御引導と悠久不斷惡業制節の御慈悲あるのみであります。此御引導御慈悲の洪大なることは人を其信不信知不知によつて區別せざるは勿論宇内の有りと凡有る禽獸蟲魚一切生物草木塵芥土石に至るまで悉皆抱擁一として漏れるものがないのであ

ります。此の常時向上の御引導が即ち宇内萬有の進化向上して息むことのない第一原因であります。

斯の如く洪大なる阿吽阿の御愛を知覺しなかつた過去は致方なし一度阿吽阿を自覺した後は離れんとして離れることは出来ません又忘れようとして忘れ能はぬのでありますから只管御愛を感謝して中和の御道に準由し畢生の力を盡して御引導を順奉し惡因を逃避すべきであります。若し一心

堅固にして不退轉なるに於ては現世は必らず安樂にして當來は永久幸福の妙境に生れるのであります、其れに及ばざるものも亦日々の努力相當に苦惱減退し其だけ安樂増益して未來は復た人界に生を享くべき必然の約束であります。然るに悲しい哉猶我執偏見念々流轉するものは何時所謂地獄界に墮ちるか知れないのであります、現世は過去の情勢によつて外面人皮を被るとても内に獸的偏見念々相續する

に於ては其儘既に獸界の眷屬でありますから内なる念々延長して來世は獸界に墮生すべきは必然の約束であります、どうしてこれが怖れずにゐられるのでありましようか、若し現世に於て假令一步たりとも向上して永久幸福の妙境に近寄ることなく相變らず背戾煩悶を繰返へすに於ては、前途の悠久と苦惱の無量を覺悟せざるべからず、遭ひ難き人界を空しく過ぎ復た何の世に正覺成就を期待するや。

阿吽阿の妙御活動は智性の連鎖活動と成り現象界に在つては萬有の交互扶持運動として現はれるのであります。其故に智性は申す迄もなく必然に本性を稟有して居りますから個性としても箇々欲に蔽はれる所なくは智性明かにして自ら隣を愛し交るく互に扶け持つのであります。然るに唯だ一つの我執偏見が種々雑多の不和對立反抗の因となつて交互扶持圓滿和同を阻害するのであります、洵に悲しむべ

き次第であります。萬物の靈長たる人間は此我執偏見の惡因を捨離し内に存する智性を明らかにし以て堪忍・仁愛・禮儀・廉恥・忠君・愛國・信友・孝・悌の人道を躬行して煩悶苦惱の惡因を避け圓滿に交互扶持和同して俱に樂土に安住すべきであります。古來賢哲の遺訓は人道を説くこと甚だ詳でありますから能く之を研究して參考應用すれば人道の實踐上便且つ益を受けること多しと思ふ。

交互扶持は個性の本分なることは前に演べた通りであります。が、人間社會に在りましては自律・自助が社會構成成員たる資格の必要條件でありますから、本分・條件恰も車の兩輪の如く提挈して、相俱に前進すべきであります。自律・自助を怠ることは聯絡活動連鎖の一つに缺陷が出来たことになりすから全體の活動上自然に自律・自助を怠る者は社會構成成員團體より落伍して憩ふる所なき危地に行き詰る

様になります。が、之は自業自得で洵に止むを得ざる因果であります。然し隣人としては個人としても將又團體員としても宜しく道心を鼓舞して之に教へ之に忠告し之を導き之を助けて自律・自助の大路に立たしめるやうに勗むべきであります。然して猶自立し能はぬものは孤獨・癡疾と共に其の生活と慰安の爲めに分に應じて盡力するのが交互扶持當然の本分であります。

さて是迄演べました通り萬有は此悠久中間期に於て常時向上の御導きと間斷なき惡業制節の御愛に依つて終に至善中正に止り交互扶持亦圓滿和同して無臭無色智性の活動永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉るのであります。此に至つて現象界萬有始中終の次第一と通り了解せられたと信するのであります。

以上縷々演べし所を一言に要約すれば一切思案行爲唯愼で御引導に順ひ奉れば萬德其中にありと言ふことであります。既に斯の如く明かに自覺したる上は愼で御引導に順ふ外に何一つも不足あるべき筈なし、唯感激感謝あるのみであります。

是を以て予の體驗談は訖りました。以下阿吽阿に付いて其大畧を演べることに致します。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

阿吽阿

第一

智無窮に彌り自由活動する唯一御存在。

自由は絶対御存在の御特性、御活動の所以に御存在す。

智時空を様とする御存在。

活動は時間を充實す、時間を充實することは存在、空間は活動の様式。

智有無を超越する御存在。

時間は無始無終、空間は無邊無涯、無始無終無邊無涯は畢竟無。

智御自愛御自處の妙動に因りて部分界一切萬有化成し、種々相現象し、種々境發展す。乃ち部分界萬有は因果の御則に順ひて化易推移し、御慈悲と崇め奉る愛の御引導に隨ひて進展向止する所の根本智妙動の連鎖なり。故に萬有は此の中和統齊の御道御愛と御因果則の妙に因りて

推移進展向上して遂に根本智に契合完全す。

智個性不二。部分界の箇々は極微も其構成も悉皆智性即ち智。是を以て箇々は必然活動す。箇々は箇々に必要の箇々欲、箇々機能を稟有す。箇々欲、箇々機能を賦けたる箇々は智性たると與に個性。箇々欲允に中和を得て智性明らかなる個性は即ち全一の部分的顯現。

智性は根本智を自覺し靈界に感應し箇々機能と協作用して對象を認識す。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊拜記

右は予の直覺するところであります。眞理は究竟萬人の齊しく覺るべき筈のものであります、ゆゑに、姑く各位の自覺を俟つこととしてここに其の意義を述ぶることをさしひかへます、が、併し予の體認する所は前
の體驗談によつて略ぼ御了解なりしことと信ずるのであります。

禮 讚 謝

第 二

豁然として圓滿歡喜し敬て白す。

南無阿吽阿 御引導に順ひ奉る靈界現象界悉皆俊と俱に謹
で

無窮に彌り有無を超越する唯一御存在を禮拜し奉る。

御愛 を以て部分界を導き給ひ、御因果則を以て齊へ給ふ
中和統齊の御道を讚美し奉る。

萬有個性を化成推移進展向上せしめ遂に

阿吽阿に合ひ奉りて永久平和幸福を享け得さしめ給ふ御慈
悲を感謝し奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

右は前に演べし如く萬有は常時向上の御引導と悠久不
斷惡業制節の御慈悲により箇々偏見斷絶して至善中正
に止り交互扶持圓滿和同して終に永久幸福の妙境阿吽
阿に合ひ奉るのであります。其中正和同の御道に統一
し之に背くものを制節矯正して中和一筋に齊へ給ふ御
愛を前記第一の通り正に自覺し御愛の有難さ勿體なさと
に感激したる者の先づ靈界現象界悉皆と共に謹で靈格

を禮拜し奉り中和統齊の御道を讚美し奉り萬有を導き
て遂に永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉らしめ給ふ御慈
悲を感謝し奉る所の智性必然の顯現であります。

祈 禱

第三

敬て白す

南無阿吽阿 謹で御靈を禮拜し奉り御道を讚美し奉り御慈

悲を感謝し奉る。

願はくは御慈悲に頼り奉る靈界現象界悉皆平和に進展向
上し遂に阿吽阿に合ひ奉り永久平和幸福を享け奉るべく
導き給へ。

願はくは萬有個性箇々欲に耽り偏見我執し邪道に迷ふと
きは速かに俊めて智性明らかに一切思案行爲中和統齊の
御道に準由し奉るべく導き給へ。

願はくは俊と同行の朋堪忍・仁愛・禮義廉恥・自律自助・禮讚謝生活なる人道を實踐躬行し偏見我執を捨離して清淨活動し智性明らかに覺を成就して阿吽阿に合ひ奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

右は常時向上御引導と悠久不斷惡業制節の御慈悲に賴りて遂に永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉らしめ給ふ御

愛を前述の如く自覺する上は此十分の上に尙ほも祈り求むる何ものも無く只管御引導に順ひ奉るのみであります。仍て、過去悠久に涉り御愛に賴りて進展向上する靈界現象界悉皆と共に茲に謹で靈格を禮拜し中和統齊の御道を讚美し下記三段の誠意決心を明かにする次第であります。則ち御慈悲に賴り奉る靈界現象界悉皆御導きに順ひて平和に進展向上し遂に阿吽阿に合ひ奉

り永久平和幸福を享け奉らんと只管に努力する決心と、次に、萬有個性箇々欲に耽りて智性を蔽ふにより偏見我執の邪道に迷ふのであります、が、已に中和統齊の御道を自覺致しましたる上は今後一切思ふこと行ふこと中和の御道に遵ひ奉るべき決心を述べて、更に、上の如く決心致した我等自覺の輩は我執を斷絶して堪忍・仁愛・禮儀・廉恥・自律・自助・禮讚謝生活なる人道

を實踐し智性を明かにして交互扶持し御導きに順ひて永久幸福の妙境に合ひ奉らむと欲する決心を三たび嚴肅に述べたのであります。

皇室祖國

第四

天祖天照大神 を尊崇禮拜し奉る。

今上陛下聖壽長久皇室御繁榮を祈り奉る。 謹て天壤無窮

の寶祚を奉戴し一君億兆和輯一家の如き御國體祖國を衛
る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

右は人道に基く日本國民道德の肝要であります。天祖
を崇拜するに依り同時に皇室國家に於て祭祀せらるる
護國の神祇を遙に崇拜し國恩を感謝するのであります。
是れ古來相傳の護國精神を體認し國民舉て其精神に活

きる念願であります。

今上陛下聖壽長久皇室御繁榮を祈り奉り、寶祚の隆天壤
無窮を奉祝して祖國を衛る、は、是れ我日本國子民傳
統の忠君愛國の精神繼紹を誓つたのであります。

祖先考妣

第五

吾が家御先祖累代御尊靈・考妣御尊靈を禮拜し奉る。御

尊靈阿吽阿に合ひ奉り永久平和幸福を享け給はむことを
祈り奉る。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

右は往時を偲びつゝ、祖先考妣を禮拜し、阿吽阿に合ひ
奉りて永久幸福にましまさんことを念願する子孫の稟
性顯現にして人道の大本であります。庶幾くば御導き
に頼り稟性常に明かにこの人道を盡さんと欲する決心
を述べたのであります。

子孫

第六

南無阿吽阿 願はくは吾が子孫末流を心身健全に、偏見我
執を捨離し中和統齊の御道を體得して清淨活動し智性明
かに覺を成就して阿吽阿に合ひ奉り永久平和幸福を享け
奉るべく導き給へ。

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

俊

右は、子孫は交互扶持關係の最も手近なるものであります。仍て、其心身發育の幫助に始まり中和統齊の御道に準由し偏見を斷絶し交互扶持して人道の實踐を完ふすることに至るまで能く訓誨指導して過誤なき様内に求めて御引導に頼り奉らんと欲する念願の陳述であります。

體認

第七

阿吽阿

阿吽阿を絕對靈格・智・妙・覺の表章とする謂は既に演べし所の如し。阿吽を禮讚謝辭と爲す意義は本文の通りであります。

南無 歸命頂禮。

南無は梵語の音譯にして歸命頂禮のこととあります。儒教の傳來以來漢土文字を日常使用すると等しく此類の慣用語を數箇所用ひてありますが之は唯だ便宜上のこととありまして何等佛教其ものに關係があるのではありません。則ち阿吽阿に合致し奉らんと念願であります。

數珠

數珠も亦佛者の用ふる所であります、が、當方に於ては是に依て部分の連絡するところに交互扶持を觀じ一貫する所に萬有即全一を觀じて智個性不二なることを象徴するのであります。佛教に關する所は勿論ないであります。

靈界 智性の境遇。

無臭無色智性本來の活動境であります、乃ち、現象界

の外に智性本來の活動界を觀ずるのであります。

境・界 個性念々の境遇。

境と言ふも界と云ふも同じ意味であります。智性の活動過程の點々とても觀るべき或點に於ける一念の境遇であります。其の或一境に滯ること久ふして個性を現ずることは既に演べし所の如くであります。

禮讚謝

禮讚謝第二に於て演べました如く御愛に感激し歡喜溢るる智性の現はれでありますから、常に御引導に順ひ苟も戻ること無しとの決意が自ら其中に含まるるのであります。

祈禱

祈禱第三に演べました通りでありますして阿吽阿の常時向上の御引導を踰へて尙ほ求むる所あるのではなく向

上御引導と、惡業制節の御愛を自覺し只管に御愛に頼り縋ることに意を致す心得を述べたのであります。

正直

人は内なる智性の偏見我執に蔽はるる所なければ必ず御導きのままに言行すべき筈であり、御導きに由る所の言行はまた必ず場合適切自他利益すべき筈であります。五官の體驗をいつはらざることのみが正直にあら

ず、内なる智性の御導きに順ひ正しく直く言行するところが眞の正直にして其が即ち人道であります。古來人道の教は千言萬語ありますが其の基く所は智性の動機に由る先哲の言行を實踐上の便宜に組織編纂したものに外ならぬのであります。此故に未だ曾て遺訓につきて學問修行せしことなき輩も我執を捨てて誠に智性明かなれば内に求めさえすれば場合適當の人道は知り難

からざる筈であります。聖賢の教ありて而して後に人道初めて出来りたるにはあらず、人道は人界に存在する所の中和の道であります。然しながら古來の賢哲遺訓は人道實踐上の一定基準として甚だ便宜多きが故に其内容を正しく了解し之を己に求むる筈とせんことを廣く世に奨むるものであります。

人道

我執偏見の蔽ふ所なき純誠智性の顯はるる所人界に在つては之を人道と謂ふ、凝つては交互扶持一般、堪忍・仁愛・禮義・廉恥・自律・自助・信友・孝・悌・忠君・愛國・祖先崇仰となるのであります。故に人誠に内に求むれば忽ち人道を感得し得べき筈であります。聖賢の遺訓は人道を説くこと頗る詳であります、が故に、人道實踐上之を機械的模範とせず採つて以て己に求む

る指針と爲さば得るところ多大なりと信ずるのであります。

所謂正義なるものも亦中和の御道でありますから、交互扶持圓滿和同に資すべきものたるは勿論にして、短見なる理窟に偏して中和を妨ぐることがあつてはならぬのであります。之は人事の大部分に關涉する觀念でありますから、慎重に考慮し正義に藉口して人道を踏

み違えてはならぬのであります。

抑も我が萬世不易の御國體の精華は君の民を視させらるること赤子の如く子民の君を仰ぎて親み尊み畏むこと骨肉の親に異ならず。君は億兆赤子の福祉を専ら軫念し給ひ、民意を斟酌して統御し給ひ、億兆子民は大御心を輔翼し奉りて齊しく御仁澤に浴する所に存するのであります。大御心専ら子民の福祉増進にあらせらる

るが故に萬機の御統率曾て億兆の父母たるに違はせら
 るることあることなし。斯の如く萬世一系御傳統の尊
 嚴は如何なる民族も中途にして擬し得べきものにあら
 ず。天孫國を肇め給ひし以來自ら整齊の成果にして萬
 國に比類なく理想をも超越する寔に金甌無缺の御國體
 であります。我等子民が身を忘れ家を顧みずして赤心
 皇室を擁護し奉り祖國を衛るは之智性の發露にして人

道の樞軸であります。

祖先奉仕

既に演べし所の如し。

處世

人として此世に處するは慎で中和の御道に遵由する外
 に何もものもないのであります。中和の御道に遵由すれ
 ば我執偏見なし、我執偏見なければ煩悶苦惱の被制節

果もなき筈であり、煩悶苦惱なければ智妙活動連鎖機能本分の活動は安樂なるべくして勞困する謂れはなき筈であります。

清淨活動

前に屢々演べし如く我執偏見を捨離し歡喜禮讚謝して萬有交互扶持することが即ち清淨活動であります。誠心此教を遵奉し上記の諸項を體認し謹で御慈悲を仰ぎ

奉る。是が同行者の常時念願であります。

俊

南無阿吽南無阿吽南無阿吽阿。

遺 囑

第 八

智 個性不二。

前に演べし如く智妙活動の連鎖部分なる無臭無色の智性其連鎖活動中偶々或境に留滯すること之を久ふして

其境遇現象化したのが所謂現象界個性でありますから、個性は本來智なることは申すまでもないのであります、が、唯だ之に部分なる箇々欲が附帶して個性的に働くのであります。此故に、箇々欲誠に部分としての必要適宜なれば智性内に明かにして中和統齊の御道に戻ることあるべからず、中和統齊の御道に戻ることをなれば我執偏見なく交互扶持亦圓滿和同しそれが即ち安樂

幸福の妙境なのであります。然るに箇々欲必要適宜を踰へ箇々執着する時は智性之に蔽はれて種々境に或は留滯し或は輪廻流轉して根本智を自覺する機會もなく背戾被制節の渦に煩悶苦惱を繰返すのであります。苦惱を解脱し永久幸福の妙境に到るは唯根本智を自覺し偏見を斷絶して御引導に順ひ阿吽阿に合ひ奉る一途あるのみであります。

種々境に流轉する個性も間歇的執着なく偏見なく智性
 允に明かなる時或は根本智を感じて感激感謝し或は無
 意識に中和の御道に準由して安樂するのであります。
 中和の御道準由の善因には善果安樂伴なひ御道背戻の
 悪因には悪果苦惱伴なふのであります。御道に遵ふも
 のが存立し背戻するものが畢竟絶滅すべきは申すまで
 もなく御道の道たる理勢であります。故に中和の御道

に戻ることの徒勞にして唯煩悶苦惱することの外には
 畢竟何もかも残らざることとを先づ悟るのが煩惱解脱最
 初の肝要知識であります。抑も智性が聯鎖機能活動中
 偶々個性化したる後は間斷なく念々相續生々延長する
 のであります。故に人界の眷屬は一旦過つて人外に墮
 ちることありとても誠に過去を懺悔し正しく人道を實
 踐すべく誠意決心内に發起するに於ては其念其儘延長

して當來は復た人界に生を享くべきでありますから此
 遭ひ難き人界に生を享けたる我等は是非とも既に知る
 所の人道を堅固に遵守し尙一段の向上正覺成就を以て
 終生の念願とし萬一にも人外に墮ちざる覺悟が第一で
 あります。

智個性不二のゆゑに個性は箇々欲偏見の隠蔽を除去す
 れば智性自ら明かにして根本智を自覺し靈界に感應出

來るのであります。申す迄もなく自覺感應共に智性の
 直覺でありますから五官の仲介を俟たぬは無論のこと
 であります。それゆゑに卜筮巫術其他靈媒に類する事
 柄は所謂妄想と觀るべきでありますから之に惑はざる
 注意が肝要であります。

認識は之に異なり、個性の相對關係でありますから、
 相對的箇々機能と協作用して後に相對を認識し得るの

であります。又、凡そ認識は複雑多様の基礎上に構成せらるるのでありますから、人たるものは先づ心身の發育を完ふして箇々機能の缺陷を防ぎ、自己經驗の錯誤を匡正すると共に認識一般（諸科の學知）を能く應用し以て人道の實踐を誤らざることが肝要であります。之に依つて人類は寔に善因即ち御引導に順ひ奉り、交互扶持圓滿和同して善果安樂幸福を享くるのであります。

す。

爾等吾が子孫に望む所は常に阿吽阿の讀誦を懈らず、禮讚謝祈禱思念に止住し、以上縷々述べし所を審に辨へ、此教を廣く世に傳へて衆と共に現世安樂永久幸福の妙境阿吽阿に合ひ奉られんことであります。

又廣く世の同行者に望む所は冀くは予の子孫を鞭撻して此教を世界に傳え布き此教を核心とする文化事業一般を

昭和十年五月二十七日印刷
昭和十年六月一日發行

版權
所有

著者

東京市芝區伊皿子町二十六番地

富岡俊次郎

發行者

東京市芝區伊皿子町二十六番地

富岡清行

發行所

東京市芝區伊皿子町二十六番地

財團法人 阿吽阿會

印刷所

東京市小石川區久堅町百八番地

共同印刷株式會社

定價金貳拾錢也

67
438

67
438

終